

時慶記のキリシタン(番外編 2) 太宰春台の「朱子学者は天主教徒になる」説

—『聖学問答』享保 21 年 (1736) より—

島野達雄

- 問曰。宋儒の学を聖人の道に非ずといふ。其の説如何。
- ①答曰。宋儒の学は、性と理と二つを工夫の本とする故に、或は性学と称し、或は理学と称す。或は二つを合せて、性理学ともいふ。
- ②宋儒、心法を談じて精微を極むとおもへども、仏者の心法に比すれば甚だ簡略にして似たるものにも非ず。さる故に程子〔程顥・程頤の兄弟〕朱子〔朱熹 (1130-1200)〕の末流、一生の工夫を費して心法を学びて、明らめられぬ處ある故に晩年に及びて節を折き仏法に帰依せる者多し。
- ③明の萬曆年中〔1573-1620〕に、欧邏巴国より利瑪竇 (1552-1610) といふ者、入朝して天主教を説きしに、其の説、程朱の性理学に似て、其の精微なること性理学に超えたる故に、**性理家の学者、己が道を捨てて天主教〔キリスト教〕を受けたる者多し。**『天経或問』を作れる游藝〔游子六〕、『通雅』を作れる方以智等、すなはち其の人なり。
- ④日本にても、**朱子学より仏法に帰する者多し。**山崎闇斎 (1619-1682) が如きは、仏法に帰せずして神道に帰す。闇斎も仏法に帰すべき者なれども、本来禅僧より環りて儒になりたる故に、復た仏法に帰することを耻ぢて巫祝〔シャーマニズム〕の道に走れり。
(※藤原惺窩・林羅山・山崎闇斎は、ともに仏僧から朱子学者になった。)
- ⑤日本には東照宮〔徳川家康〕の法にて、天主教を禁ぜらるる故に、朱子学の徒もこれに帰することを得ず。若し今にも天主教の禁を弛められれば、闇斎が如き者は必ず皆な天主教に帰すべきなり。
- ⑥凡そ常人は、何にても似たる事の少し勝れる事には、必ず心移す者なり。
畢竟宋儒以来の学者、先王の道を知らざる故に、外慕の心止まずして他の邪説に惑ふなり。程子の学を仏学なりといひし者は、宋の代に於て王廷秀が如き、其の人なり。『困学紀聞』に見えたり。朱子の同じ時に陸象山、明の代には王陽明、王龍溪など、程朱の道を破すれども、己が説くところは皆な仏者の見解なり。明の末に呉廷翰といふ者、『吉齋漫録』『甕記』『櫝記』などいふ書を著して、程朱の道を闢きしは豪傑なり。日本の伊藤仁斎 (1627-1705) も呉廷翰が書を読みて悟を開きたりと聞けり。
- ⑦徂徠 (1606-1728) は一途に六経〔易経・書経・詩経・春秋・礼記・楽経〕孔子の説を信じて先王の道を悟り、宋儒の説の邪説なることを知れり。善く六経論語を読まば、徂徠の説の臆解〔誤解〕にあらざることを知らんものなり。

※朱子学は、自然現象や人性を理気二元論でとらえ、『孟子』以来の普遍的な原理、いわば客観性を追求している。朱熹の高弟・蔡沈は『書経集伝』を著し、四分暦の十九年七閏法 (章法、

メトン周期)に解説を加えた。この解説は、吉田宗恂が本草序例抄に、和算家・今村知商が日月会合算法に引用しており、イエズス会のジョアン・ロドリゲスも知っていたと判断できる。和算序林の「吉田宗恂『歴代名医伝略』の諸版」の「五、地円説の伝来」を参照されたい。※対して、徂徠学派(古学派のうちの古文辞学派・^{けんえん}護園学派)の太宰春台(経世派)や服部南郭(詩文派)は、人性の多様性を前提にして、自然現象を情緒的すなわち主観的にとらえることを重視した。

なかでも服部南郭は、「漢詩は人の情(情緒)を描くもの」と作詩のコツを述べている。この立場は、「感情が納得しなければ、人間は納得しない」とした数学者・岡潔の方法論に近い。岡潔の考え方については高瀬正仁『発見と創造の数学史』を参照されたい。

また「平生我々が善いとか悪いとかと申すのは、要するに自分の気に入るか入らぬかをいうのでありまして、それはいつも我より他に対して言うのであります」と述べた医学者・医史学者の富士川游の考え方とも共通している。

これらは、「ふと物に感じる心(感情、感性、情緒、美意識)」があればこそ、芸術や科学(学問)の創造ができる、という立場に立っている。

※太宰春台(1680-1747)の「朱子学者は天主教徒になる」説には、仏僧から朱子学者になった藤原惺窩と林羅山は登場しない。惺窩の友人吉田宗恂も、羅山の友人角倉素庵も批判の対象となっていない。なぜなら、将軍家に近侍した宗恂や羅山を批判することは、彼らの主君である将軍家を批判することになるからである。

逃亡中の高野長英をかくまった関流宗統の内田五観に何の咎^{とが}めもなかったのは、五観が将軍家の直臣つまり御家人^{ごけにん}であったからであろう。

※惺窩は秀吉や家康に儒学の講義をおこなった。家康に仕官するよう要請されたが、代わりに林羅山を推挙した。以後代々、林家は大学頭^{だいがくのかみ}として幕府の「正学」すなわち朱子学を講義した。

※キリシタン禁制についても、旗本つまり御目見^{おめみえ}以上の幕臣に宗門改めのような詮議はおこなわれなかった。荻生徂徠『政談』(享保12年ごろ成立)には、「御旗本に列する輩には親類(キリシタン類族)の詮議なし」として、「大友宗麟、竹中筑後守(竹中半兵衛)が子孫などの如^{ごと}き是れ也」と記されている。

※『聖学問答』が刊行された享保年間、著者の春台をはじめ市井の人々は、江戸時代前期の代表的な朱子学者である惺窩や羅山と、キリシタンにきわめて近い位置にいた吉田角倉家との関係を、公言できない暗黙の了解事項としていたのではないだろうか。

○徂徠が持っていた和算やキリシタンに関する認識については、『華自紅』の「第9篇荻生徂徠と和算」に詳述している。

○七代将軍吉宗以降の国学・蘭学とキリスト教との関係については、前田勉『江戸後期の思想空間』が詳しいが、残念なことにこの本は、和算を芸事や遊びと捉え、思想性が乏しいとする小倉金之助以来の伝統(?)を踏まえ、江戸後期の対数表や三角関数の移入、つまり西洋数学が漢訳洋書などを通じて和算に及ぼした影響については一切触れていない。

○徂徠学派の影響をうけた朝鮮儒者の丁若鏞とキリスト教との関係は、李基原『徂徠学と朝鮮儒学—春台から丁若鏞まで—』の273pが明らかにしている。